



特集

ラオスの村で専門家とともに進める栄養改善の取り組み
協働と協創が育む支援の循環

News Letter

2026年
3月30日発行

第53号



ラオスからの報告

ラオスの村で専門家とともに進める栄養改善の取り組み 協働と協創が育む支援の循環

ISAPHラオス事務所
三浦 夕季



ISAPHラオス事務所は、カムアン県の中でもアクセスが難しく、子どもの栄養不良の割合が高いボラパー郡とナーカーイ郡で活動を拡大しています。

同地域では、栄養評価に必要な身長計や体重計が十分に整備されていない保健センターもありました。そこでISAPHは、9つの保健センターへ機材を配備し、栄養改善に関する研修を実施しています。

私たちが栄養改善で目指しているのは、機材の提供や研修そのものではなく、住民の行動改善が継続的に

生まれる仕組みを地域に根づかせることです。しかし、職員や住民の意識や行動が実際にどのように変化したのか、またそれが取り組みの成果としてどの程度表れているのかを評価することは容易ではありません。

今回、機材の活用状況を確認するモニタリングの一環として、公衆衛生学修士、社会健康医学博士で疫学・保健統計学を専門とする本間隆之専門家に同行いただきました。本間専門家は、知識や技術の習得にとどまらず、学びのプロセスやそれが実際の行動にどのように反映されているかという視点から現場を見ていただきました。

本稿では、本間専門家の視点から、ラオスの現場で見えてきた気づきや示唆をご紹介します。

株式会社マイ・ビジネスサービス
社会健康医学博士
本間 隆之



身長・体重を測定するという行為

保健センターを訪れ、計測機器の確認と、栄養や健康教育の実践方法についての研修が始まる。私はその様子を傍らで観察していた。

3度目のラオス、大冒険の2週間

初めてラオスを訪れたのは2025年2月。一気にその魅力にはまり、5月には東京代々木公園で開催されたラオフェスに参加。雨季のラオスをみたくて8月に再訪。そして今回12月。ISAPHの活動にプログラム評価の専門家として同行した。



悪路を進み、目的地へ

山を越え、川を進み、湖を渡り、シュラフで夜を明かし10日間かけて保健センターのある9つの村を巡った。日常のこことのように、バイクは壊れ、船は浸水した。

一日の大半をPCの前で過ごす日本での生活からすると、道中のすべてが大冒険だった。だが、険しい道の先にたどり着く村々は、例外なく美しく、穏やかで、桃源郷のようだった。



演習を観察する本間専門家

身長と体重を測り、成長曲線に点を打ち子どもの栄養状態をアセスメントする。何のことはない作業に思えるかもしれないが、今回巡った保健センターでこれをスムーズに行える場面は必ずしも多くなかった。

あおむけで測定する身長計をどのように使用する



身長測定の様子



体重測定の様子

か迷う様子や、成長曲線の記入に苦心する場面もあった。当初それは技術や熟達度の課題かのようにみえたが、いくつか似たような状況に出会ううちに、そこには行為の前提となる概念や文化の違いが関わっているのではないかと感じるようになった。

身長や体重が健康的な成長を表す指標であるという理解、とりわけ5歳未満児では栄養状態が数値に大きく影響するという認識、成長を時間の中の変化としてとらえる発想、個の測定値を集団の中に位置づけて判断する視点、そして「食・栄養・健康の関連」という概念の共有。こうした前提が重なってはじめて、成長曲線に点を打つという作業は、意味を持つのだらうと感じた。

こういった「うまくいくために必要な課題」を一つひとつ発見しながら共有する中で、研修内容は日々アップデートされていった。



慎重に成長曲線に点を打つ保健センター職員

測定作業を、健康支援に



住民と視線を合わせて対話

健診は単なる測定会ではない。本人の健康増進を応援する機会であるべきだ。しかし、ともすれば「支援が必要な人を見つける場」で終わってしまう危うさもある。ISAPHは計器の提供にとどまらず、保健センター職員が栄養改善につながる健診を、主体的に実践できることを目指している。

研修では、これまで十分に行われてこなかった健康教育の要素を取り入れていた。健診結果を共感的な態

度で伝え、親をエンパワーすることを重視していた。測定結果の意味は住民の方々にとって、まだなじみの薄いものかもしれない。しかし、一人ひとりに子どもの状態を丁寧にフィードバックし、特段の支援を要しない子どもの親にも「問題ない」ではなく「よく育っていますね」と共感を示す。その積み重ねによって、保健センターが「あなたの健康を応援している」という姿勢が、確かに伝わっていくのではないだろうか。そうした関わりは、健診に足を運んでくれた親子との信頼関係を育み、やがて保健センター職員が村の中で頼られる存在となっていく。その可能性を現場で感じた。

協働が生む問い

専門家が関わる意義は、答えを示すことではなく多くの問いに出会うことにあるのだと思う。現場で起きていることを、自分なりの角度から言葉にし、対話するための視点を加えることにある。また、ISAPHには、そうした協働・協創を迎え入れる柔らかさがあった。私自身、今回の経験を通じて、研究者として、また一人の人間として、多くの問いに出会い、持ち帰ることになった。それらの問いを多くの人と共有しながら考え続け、少しの行動に反映すること自体に、協働の価値があるのだと思っている。

こうした機会を与えてくれたISAPHとお世話になった皆さまに、この場を借りて感謝申し上げます。また次回のプロジェクトにおいて専門家として参画する予定です。またお会いできる日を楽しみにしています。



保健センター職員と昼食の様子

今回の協働は、保健センターの基盤整備にとどまらず、栄養改善事業の評価指標や評価方法を検討していく基盤づくりにもつながりました。本間専門家の視点は、知識や技術の習得だけでなく、現場で起きていることをどのように捉え、次の行動につなげていくかを考える機会となりました。ISAPHでは、このように専門家や地域の保健スタッフと協働しながら、ラオスの村で栄養改善活動を進めています。(三浦)



マラウイからの報告

マラウイとラオスの看護師が語る

マラウイ視察で見た「健康行動をそっと後押しする力」

ISAPHラオス事務所
三浦 夕季



ISAPHマラウイ事務所
萩原 愛美



ラオスでの母子保健活動に活かすため、2025年11月1日～19日、ラオス事務所の三浦看護師がISAPHマラウイ事務所を訪問しました。

現地で活動する萩原看護師とともに、病院や保健センター、村の現場を訪れ、母子保健・栄養改善事業の取り組みを視察しました。

マラウイの現場で見えてきたのは、村の人々の行動を後押ししている社会規範や「自分にもできる」という自己効力感といった要素でした。

本記事では、今回の視察で得られた気づきや学びを、萩原看護師と三浦看護師の対談形式で紹介します。

(本訪問は外務省NGOインターンプログラムの一環として実施されました)

「周囲の目」が健康行動を後押しする

萩原：今回の訪問では、首都から郡レベルまで様々な病院を訪問しましたが、特に印象に残っていることはありますか。



Mzuzuの病院を訪問。首都から郡レベルまで、様々な病院を視察しました

三浦：母子手帳が広く使われていることがとても印象的でした。ただ、医療スタッフが記入した内容が、その後どの程度活用されているのかは少し気になりました。

萩原：確かに、病院でも地域でも母子手帳に記録をしている様子をよく見ます。診断や治療内容が記録されているので、乳幼児健診の際に成長曲線から外れていれば、病院の記録を見直すこともあります。ただ実際には、「書いて終わり」になってしまうこともあり、現場の課題の一つだと感じています。

三浦：その点はラオスでも同じです。成長記録も、行政への報告のために記入されている場面があり、本来の目的や意味を共有する難しさを感じています。

もう一つ印象的だったのは、コミュニティの規範や周囲の目が人々の行動に強く影響していることでした。例えば、周囲からどう見られるかを気にして行動を変える場面が多く見られました。

萩原：出産の場面でもそうですね。自宅分娩をした場

合、周囲から否定的な反応を受けることがあると聞きます。

三浦：そうした社会規範は、人々の行動を抑えること

もあります。逆に行動を後押しする力にもなると感じました。うまく活かすことができれば、健康行動を広げるきっかけにもなるのではないかと思います。

「私にもできる」という自信が活動を後押しする

萩原：三浦さんは、村で実施している調理実習も視察されましたよね。どんな感想を持ちましたか。



村の乳幼児健診に参加しているお母さんたちとお話をしました

三浦：調理実習は、マラウイの特性に合ったとても効果的な活動だと感じました。実際に自分たちで作ってみることで、「自分にもできる」という感覚につながっているように思いました。

萩原：確かに、実習は自己効力感や次の行動に広がりますし、何よりお母さんたちが楽しんで実習をしていることも強みですね。

三浦：成功体験があることで、自信につながっているのだと思います。

萩原：そうですね。SNSで活動を共有することで、「私もやってみたい」と参加が広がることもあります。

三浦：達成感が積み重なることで、「自分にもできる」という感覚が強くなっていくのだと思います。そうした積み重ねが、活動を広げる力になっていると感じました。

マラウイの学びをラオスの活動へ

萩原：今回の視察では、「周囲の目」や「成功体験」がマラウイの人々の健康行動をうまく後押ししていることが見えてきました。マラウイでの学びは、ラオス農村部のお母さんたちの健康行動の後押しにどのようにつながるとお思いますか？

三浦：マラウイでうまく機能している要素が、そのままラオスでも同じように働くとは限らないと思います。文化や地域の状況が異なるので、同じ方法をそのまま当てはめることは難しい部分もあります。

「周囲の目」をそのまま活かすというよりも、コミュニティの中で、人の行動が周囲の人との関係によって変わっていくという点は、ラオスでも参考になる部分があると思います。例えば、小さな成功体験を見える形にすることで、「あの人ができたなら自分もできるかもしれない」と感じる人が少しずつ増えていくこともあります。ラオスの文化や地域の状況に合わせなが



村の乳幼児健診では実際に子どもの体重を測りました

ら、そうしたきっかけを作り、人々が自然に望ましい行動を選べる仕組みを検討していきたいと思います。

萩原：三浦さんの話を聞いて、住民の自主的な活動を支えるには、人々の行動を後押しする要素を理解することの大切さを改めて感じました。

三浦：はい。人々が行動を起こす背景を理解した上で活動を考えることで、より地域に合った取り組みができるのではないかと感じました。

現場から学び続けるISAPHの取り組み

ISAPHはラオスとマラウイの2つの国で活動している強みを活かし、それぞれの現場で得られた学びを共有しながら活動を進めています。

今回の対談からも見えてくるように、ISAPHの活動は、外から答えを持ち込むのではなく、現地の人々

と一緒に考え、試しながら進めていく取り組みです。

社会規範や文化の違い、地域の人々の工夫など、現場で見えてくるものを丁寧にすくい上げながら、母子保健の向上に取り組んでいます。

こうした活動がこれからも続いていくよう、ISAPHの取り組みを応援していただければ嬉しく思います。



ラオスからの報告

日本の予防医療から学ぶ

—カムアン県保健局・外務局職員の本邦研修

ISAPHラオス事務所 石塚 貴章



1月中旬、カムアン県保健局および外務局の職員を日本へ招聘し、愛知県で研修を実施しました。目的は、日本の予防医療が社会の中でどのように機能しているかを、現場視察を通じて学ぶことでした。

日本が予防医療を推進してきた根底には、「病気になってから治す」のではなく、「体の状態を定期的に確認し、異常を早期に発見・予防する」という考え方があります。予防重視の理念が社会に定着していることを、研修員は実感していました。

ラオスでは、妊婦健診の認知度が低く、初診が遅れています。その結果、カムアン県の妊婦健診4回以上の受診率は63.9%（ラオス社会指標調査 2023）にとどまっています。受診回数が少ないと、妊娠高血圧や貧血などのリスクを早期に発見・対応する機会が減り、母子の重症化につながりやすくなります。妊婦健診は、検査・保健指導・予防的介入を届ける重要な接点であり、妊婦健診4回以上の受診は有効な母子保健介入を受けられる可能性を高めるとされています。

以上を踏まえ、予防医療の推進には、住民への啓発と制度整備の両立が不可欠と感じ、本研修を企画しました。



「理念を制度（仕組み）へ」

カムアン県保健局 セントーン副局長

本研修で最も印象に残ったのは、予防医療が理念にとどまらず、「制度」として社会に組み込まれている点です。日本では、乳幼児健診、学校での健康診断、企業に義務づけられた年1回の定期健診など、生涯を通じて健診を受ける環境が整えられています。そのため、健診は特別なものではなく、日常の一部として定着していました。

名古屋公衆医学研究所では、乳がんや大腸がんなどの検診に加え、血液・尿検査、心電図、超音波検査などが体系的に実施されていました。移動検診車による地域支援も行われています。設備だけでなく、業務フローの明確化や専門職の役割分担も徹底されており、質の高い医療が制度と組織の仕組みによって支えられていることを実感しました。今回の学びを、カムアン県の公衆衛生体制の強化に活かしたいと考えています。



日本の健康診断を体験するセントーン氏

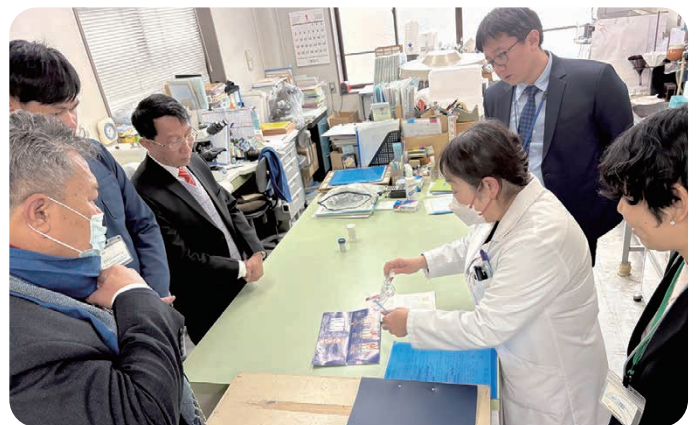


「制度（仕組み）が健康を支える」

カムアン県保健局 ワンタビー副局長

「仕組みが人々の健康を支えている」という点が印象に残りました。愛知県蟹江町では約3万7千人の住民情報が登録され、外国人住民も住民基本台帳に基づいて把握されています。健診や栄養評価はシステムで管理され、業務の流れも整理されています。また、アルコール・喫煙対策や学校との連携、専門職の配置など、住民を継続的に支える体制が整えられていました。

職員は専門性に応じて役割が明確に分かれ、人材育成も組織的に行われていることが印象的でした。個々の努力だけに頼るのではなく、行政横断で支える仕組みづくりの重要性を改めて認識しました。今回の学びを、今後の制度改善の議論に活かしていきたいと思います。



日本の子宮頸がん検診の状況を学ぶ

本研修にあたり

本研修は、名古屋公衆医学研究所のご支援により実施することができました。また、同研究所と蟹江町保健センターの皆様には、研修の受け入れおよび視察対応にご協力いただきました。両機関の皆様へ、今回の貴重な研修機会の提供に対し、心より感謝申し上げます。

2025.10-2026.2

PHOTO GALLERY



ISAPHの活動を通して、現地がどのように変わってきているのか、マラウイ・ラオスの現地職員の視点からレポートしてもらいました。



子どもたちの成長を母子手帳に記入するテドソン職員



村のお母さんたちによるポリッジ（お粥）の調理実習



テドソン・シムココ（フィールドコーディネーター）

マラウイ：チティバ県出身。ISAPHマラウイ事務所現地職員

地域の5歳未満の子どもたちの発育阻害を減らすため、調理実習や成長モニタリング、地域住民への研修を行っています。

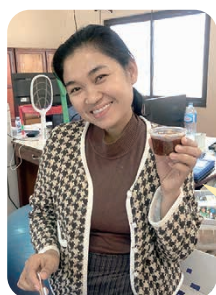
お母さんたちは、身近な食材を使った栄養価の高い食事づくりや、身長を測って子どもの成長を知ることの大切さを学びました。



カムアン県庁へ新規プロジェクト内容の説明



カムアン県保健局へ書類提出



パイワン・フォンマボン（事務担当）

ラオス：カムアン県出身。ISAPHラオス事務所現地職員

私の仕事は、プロジェクト実施に必要な書類をラオス政府へ提出し、担当者に説明を行うことです。立場の異なる利害関係者との調整や交渉はとてもハードですが、重ねる中で交渉力や英語スキルの向上も実感しています。こうした経験を通じて自分自身の成長を実感できる点に、ISAPHで働く大きな魅力を感じています。

マラウイ事務所 萩原の奮闘記 ～スイカ割り編～



初めてスイカ割りを見た子どもたちにとって、スイカ割りは呪術のような恐ろしい行為に見えたようです。マラウイの習慣を不思議に思うことがある一方で、日本の文化や風習も改めて考えると不思議なものがたくさんあると感じました。この後、最後はみんなで美味しく食べました。

編集後記

今号の特集記事では、外部専門家によるラオスでの調査をご紹介します。ISAPHの活動は、現地に常駐するスタッフだけでなく、さまざまな立場・専門性を持つ方々の関わりによって支えられています。

支援の形はひとつではなく、ご寄付をはじめ、それぞれの経験や知識、できることを通した多様な関わりが、活動を成り立たせています。



そんな広がり的一端を感じていただける今号になっていれば嬉しく思います。(村上)

ISAPHの役員名簿

役職	氏名	備考
理事長	小早川 隆敏	東京女子医科大学 名誉教授
理事	江藤 秀顕	神山復生病院 病院長
理事	渡部 和男	元特命全権大使
理事	足立 基	聖マリア病院 国際協力診療部 部長
理事	佐々 優子	オリエンタルコンサルタンツ グローバル 部門長
監事	竹之下 義弘	東京六本木法律特許事務所 弁護士

入会と寄付のお願い

ISAPHの活動を発展させるために、一人でも多くのご入会・ご寄付をお待ちしております。

- 寄付** いつでも、いくらからでもお受けいたします。
- 賛助会員** 法人 年会費：30,000円 個人 年会費：3,000円

※ご入会の方にはニュースレターをお送りします。また、オンラインサロンに参加することができます。

【お支払い方法】

- クレジットカード Syncable でのお支払い
- 郵便振込 口座名 特定非営利活動法人ISAPH 口座番号 00180-6-279925



特定非営利活動法人 ISAPH

【福岡事務所】
〒830-8543 福岡県久留米市津福本町422番地
聖マリア病院 国際事業部内 TEL.092-621-8611

【東京事務所】
〒105-0004 東京都港区新橋3-5-2 新橋OWKビル3階
TEL.03-3593-0188 FAX.03-3593-0165
E-mail jimukyoku@isaph.jp URL https://isaph.jp/

【ISAPHニュースレター 第53号 編集スタッフ】安東 久雄／村上 麻友子

社会医療法人
雪の聖母会



聖マリア病院

理事長：井手 義雄 病院長：谷口 雅彦
〒830-8543 福岡県久留米市津福本町422
TEL.0942-35-3322(代) FAX.0942-34-3115
URL http://www.st-mary-med.or.jp

- 厚生労働省臨床研修指定病院
- 厚生労働省歯科臨床研修施設
- 厚生労働省臨床修練病院
- 地域医療支援病院
- 福岡県救命救急センター
- 福岡県総合周産期母子医療センター
- 福岡県救急告示病院
- 福岡県地域災害拠点病院
- 福岡県エイズ治療拠点病院
- 福岡県肝疾患専門医療機関
- 福岡県災害派遣医療チーム指定医療機関
- 福岡県第二種感染症指定医療機関
- 地域がん診療連携拠点病院
- 福岡県小児救急医療電話相談施設
- 福岡県児童虐待防止拠点病院
- 久留米広域小児救急医療支援施設
- 自動車事故対策機構NASVA療護施設
- ISO 9001 認証施設
- ISO 15189 認定施設
- 日本医療機能評価機構認定施設 (一般病院2 〈3rdG: Ver. 1.1〉)
- 日韓医療技術協力指定病院
- 久留米市病 (後) 児保育施設

※本ニュースレターの発行は、社会医療法人雪の聖母会聖マリア病院にご協力をいただいています。